

若手句会実況中継 令和元年12月13日(金)

指導者：今井 聖氏・片山由美子氏 出席者数 19名

高得点句

1位 缶切りの長き一周冬ざるる 倉持梨恵 6点

(受講者5点、今井特選)

講評…こきこきと缶を切る音が響くところが冬ざれの感じに重なり、長き一周と言うところに一年の感慨が込められている。「鳥渡るこきこきこきと罐切れれば 秋元不死男」のイメージと重なり、缶の冷たさが伝わってくる。(受講者)不死男の句は、「鳥渡る」に空間の広さ、「こきこきこき」以降で哀愁と貧乏性を感じる。これは焼け跡の貧しい生活と、外のただっ広い空間が出ている句だ。その一方、この句はもつとクールで無意味だ。「長き一周」と言うのは情緒を失っている現代性、「冬ざるる」には都市の虚しさ、自分の中の虚しさという精神性を感じていると思う。(今井)どこで作った句かが問題だ。缶を切るのは室内だが、冬ざれの季語はやはり屋外のもの。採る側もそこを意識して読まないといけない。(片山)「冬ざれ」は、目に入るもの全ての枯れる風景を言ってもいいのではないか。窓からの風景でもいいと思う。(今井)

1位 鮫鰯の波打ちながら運ばるる 大西 朋 6点

(受講生5点、片山特選)

講評…鮫鰯のたふたふしている感じを「波打ちながら」と表現した点が写生が効いている。港か市場の風景が見える。(受講者)おなかのたふたふ感、グロテスクな感じが質感をもって表現されている。(片山)採らなかつたのは、この風景が吊るし切りの場面ではなく、箱で運ばれる最中ならば、やはり「トロ箱」などの言葉が欲しかったから。(今井)そこまで言わなくてもこの句には箱の中の平らな感じが出ているのでいいと思う。(片山)

3位 手賀沼へ飛んでゆくもの朝焚火 金井憲一郎 5点

(受講者4点、今井特選)

講評…焚き火に当たっている姿と空を飛ぶ鳥の姿の大きな景が見える。朝早くの寒さも感じられる。(受講者)手賀沼へ飛んでいく上方向のひらひらとした浮遊感と、焚き火の明らかな感じが対比として見える。(受講者)飛んでゆくものを具体的に出さない所にかえって何が飛んだと想像させる「?マークが」つき広い景となった。例えば、火葬場としたら、それは魂だったりするのだろう。また「手賀沼」という地名がしっかりしていて、いい塩梅で抽象的になりすぎずに支えている。(今井)「もの」とぼかしたところで、採れなかった。「もの」とぼかすのは景が曖昧になりすぎる危険性がある。この場合は「鳥」と思うので、「鳥」とはつきりと言って、読者に想像を膨らませさせた方がいい。(片山)僕は観念が大切で、そこに自分の内実をみることを習ってきたから、これでいいと思うが。(今井)

3位 梟の頭の軸と胴の軸 吉田林檎 5点

(受講者4点、今井特選)

講評…斬新な句で、一本の骨で頭と胴が繋がっているにも関わらず動きが違う梟の不思議な動きを上手く表現して面白い。(受講者)僕の今日最も気に入った一句だ。頭から下が別々に存在しているような動きが成立している。また文字数が9文字と言う点が視覚的にも締まっていて、塊のように衝撃力を生んだ。(今井)面白いと思いい気になったが、軸というのが読者にわかるかどうかの問題。回転軸のようなものですね。(片山)

3位 ドアノブに顔映りたる十二月

吉田哲二 5点

(受講者4点、今井選)

講評…現在のドアノブは小さいので、顔が映るかどうかは疑問だが、ホテルの大きなドアノブを連想できた。ドアノブに歪んだ自分の顔がまるで自画像のように感じたのだろう。しかも十二月のドアノブの冷たさが伝わる。(受講者) これは女性の句かもしれない。十二月は色々と着飾ることが多く、化粧をした自分の姿を確認する女性心理の現れではないか。(受講者) 句のバランスがとても良い。顔が映るものはフライパンなど色々とあるが、ドアノブに映る歪んだ顔がよい。しかも十二月は師走というように殺伐感があるのでいただいた。(今井) 私が採らなかつたのは、十二月というのは期間が長くて、焦点が定まりにくいから。映像的にはとてもいい。真鍮のドアノブに自分の顔が歪んでいる映画のショットのようだ。それならばもっと期間を狭めて、クリスマスに限定すればいいと思う。(片山)

3位 咳の子のうすき背中に手をやりぬ

大西 朋 5点

(受講者4点、今井選)

講評…子供が咳をし続けるとどんどん背中が薄くなつていく感じがうまい。「うすき背中」で体が弱い子が想像できた。(受講者) 「うすき背中」が気に入って頂いたが、「手をやりぬ」はいかにも良妻賢母で、「私はいいい母です」と自己肯定していてよくない。「咳の子のだんだん薄くなる背中」と添削したい。背中が薄くなつていく感覚に終始して、そこから自分が背中をさすつているのを読者に想像させるといい。(今井) 中村汀女の「咳の子のなぞなぞあそびきりもなや」の世界だと思った。でも汀女は「きりもなや」としたところがいいわけで、私も「手をやりぬ」が気になった。ここをどうにかしないといけないと思う。(片山)